

羽田康一 「リアーチェ・コンヴェーニョ」参加報告

2018年10月25-26日、レッジョ・カラブリア国立考古博物館とメッシーナ大学古代現代文明学科で「リアーチェのブロンズおよび紀元前5世紀のブロンズ制作」と題する国際コンヴェーニョが開催された（Convegno Internazionale: I Bronzi di Riace e la Bronzistica di V secolo a.C.）。主催はメッシーナ大学、実行委員代表は古銭学教授ダニエーレ・カストリツィオ Daniele Castrizio。初日に配布された最終プログラムを添付する（発表者の所属はこちらを参照）。実際には不参加、順序変更がいくつかあったが、全部は把握していない。私に関心を持った議論についてだけ摘記する。偏った報告になりそうだが了承されたい。

10/25（木）レッジョ・カラブリア国立考古博物館一階中央広場 [聴衆は常時 100–150 人ほど。]

Sessione 1: Inquadramento storico-archeologico 歴史・考古学

- (1) A. Arcudi, Pitagora di Reggio. Vita e opere di un artista magnogreco [Rhegion 出身の彫刻家 Pythagoras. 4 参照。]
- (2) Elena Caliri, La *Πρωμαίων μεγαλαυχία* e i bottini fatali. Osservazioni sul Catalogo delle statue di Taziano [Tatianos が Roma で見たという、多くはギリシアとオリエントから齎された彫刻作品のカタログ。4 参照。]
- (3) R. Panvini, I Bronzi di Riace a Siracusa: ipotesi della loro originaria allocazione [この辺りまでスクリーンが用意されず PPT は壁に映されていたが、吹き抜けの天窓から壁面に日が当たってスライドが全く見えなかった。]
- (4) Daniele Castrizio, I Bronzi di Riace: una proposta di attribuzione e di identificazione [Riace AB は前 450 年頃、Rhegion 出身 Pythagoras 作。本来は 3 体以上からなる群像で、Argos にあった（Argos 由来は中子土（なかごつち）に基づく。18 参照）。A は Polyneikes、B は Eteokles、失われた C は二人の母 Iokaste で、争う二人の間に入って跪いていた。B が Korinthos 式兜の下に着けていたかぶり物は korinthie kyne で、王の印。この群像は Tatianos の彫刻のカタログで言及されている（紀元 170 年頃）。紀元前後にローマ人に掠奪されて Argos から Roma に齎され、紀元 330 年頃 Konstantinopolis 遷都に際し新都に向けて運搬中、Riace 沖で海中に沈んだ（最後の推定は羽田 2003; 2008; Hada 2016 と同趣旨）。——スクリーンは装備されたが、プロジェクターの不具合のため頻繁に中断。急遽 30 分ほど、隣の展示室で「リアーチェ」訪問となった。]
- (5) A. Corso, I Bronzi di Riace e la scuola di bronzistica di Argo tra stile severo ed età classica
- (6) G. F. La Torre, F. F. Di Bella, I Bronzi di Riace tra *Ethographia* e Canone
- (7) G. Di Stefano, Echi della grande bronzistica nella Sicilia sud-orientale. Una statuetta equestre e l'Eracle di Modica
- (8) R. Lombardo, I Bronzi: da divinità poliadi a santi protettori
- (9) V. Franciosi, I Bronzi di Riace e lo scudo del "Doriforo" [Polykleitos, Doryphoros は左手に槍と Argos 式楯を持っていた。Napoli のローマコピーと Peiraieus の墓碑浮彫。]
- (10) G. Germanà, L'efebos di Adrano e la scultura siceliota di stile severo
- (11) Takashi Matsumoto, Koichi Hada, Presunte procedure di costruzione del Bronzo B di Riace [予定していた K. Hada, Tra Argos e Roma: probabile cambiamento del senso accordato ai due bronzi di Riace を回避したため、主催者側の判断で、翌日に予定されていた制作技術に関する発表のうち総合的な 5 本目をここに入れた。口頭発表は日本語で松本隆、PPT のイタリア語テキストは羽田（以下すべて）。Riace B の制作工程を（A 左脚が分鑄なら A も同じ。25 参照）、間接法を前提に、原型の制作から設置後のメンテナンスまで、概念図と再現作業写真で説明した。原型はおそらく油土（ゆど）。蠟原型の内面に鉄の芯棒が接しているのは意図的。Argos での第一次利用では、微か

に錆がかかった程度の地金色で展示された。着色は施さず、表面保護剤も当面は色彩にほとんど影響しない。]

(12) L. Rebaudo, *Stile, contesto, archeometria. I Bronzi e l'ortodossia critica nello studio della scultura greca del V secolo a.C.* [Riace に関してこれまでに提出された様式・歴史・科学的分析に基づく議論を整理。A は厳格様式、B は *contrapposto* を示していて、様式的には前後関係にあるが、AB それ自体の制作が前後関係にあるとは限らない。前 430 年頃 Ephesos での競作「傷ついた Amazones」

(Polykleitos, Pheidias, Kresilas, ...) と同様、同時期に世代の異なる彫刻家たちによってまとめて作られた可能性も考えられる。]

(13) E. Santagati, *Donativi statuari dei tiranni di Sicilia e Magna Grecia d'età arcaica*

Tavola rotonda: Comunicare i Bronzi di Riace nell'era del social. La percezione attraverso i media vecchi e nuovi. F. Pira, A. D'Arrigo, G. Orsingher, Grazia Salamone, E. Bambara, Carmelo Malacrino, Daniele Castrizio

10/26 (金) メッシーナ大学古代現代文明学科大教室+展覧会室

Sessione 2: Tecnica, restauro e archeometria 制作技術・保存修復・測定分析

(14) G. Candela, V. Barrile, V. Gelsomino, *Digital Fabrication techniques for digital archive and replication of cultural heritage: Bronzi di Riace case study*

(15) M. P. Casaletto, *Tailored scientific strategies for a sustainable conservation of archaeological Bronzes*

(16) M. Casella, *Casarea di Mauretania: la piccola Grecia di Giuba II*

(17) Giovanni Buccolieri, *La patina di zolfo nei due Bronzi di Riace* [第三次修復中に AB の前面表面のパatinaを非破壊分析した。B は第一次修復の際に表面が削られたため S (硫黄) が少ない。Zn はその時に使われた道具に由来。A の黒色patinaの S は、これまでは海中で自然に生成したものとされてきたが、第二次利用の際に意図的に施されたもの (これは羽田 2015; Hada 2016 の見解と一致)。修復者の不手際がなければ現在 B も A と同様の色彩を呈していたはず (重要。同様のことは「ブリンディジのローマ将軍断片」の頭部とトルソでも起きた)。A 表面に顕著な Pb は黒色patina S と関係があるか?]

(18) S. Levi, V. Cannavò, R. Jones, D. Brunelli, Massimo Vidale, *Lo stato dell'arte sulle terre di fusione dei Bronzi di Riace: caratterizzazione archeometrica, provenienza e tecnologia costruttiva* [Riace の鑄造土は AB とも Argolis 由来のもので、Korinthos, Athenai のものではない (これでほぼ確定)。直接法の根拠 3 つ——中子土 (なかごつち) にカオティックな部分がある。柄 (ほぞ) を作って繋いだ箇所がある。内側に向かう指の跡 (私たちの判断では実質この 3 つ目だけが最後の砦)。]

(19) I. Angelini, Massimo Vidale, G. Artioli, G. Guida, *Nuove indagini archeometriche sui Bronzi di Riace: studi di provenienza del metallo* [ブロンズの由来が AB で異なる。A は西方 Spagna-Italia、B は東方 Athenai-Kypros (これは重要。AB の確実な相違点が一つ増えた)。足柄の Pb は Laureion 産 (羽田・平尾 2013; Hada 2016 と同じ結論)。]

(20) G. Stern, *At the inauguration of the Ara Pacis Augustae on the 30th January 9 BC: what the Roman audience saw* [前 5 世紀ともブロンズとも制作技術とも関係のない Ara Pacis の話をここに入れ、質疑を含め 1 時間も費やしたのは Messina 大学執行部の重大な過失。学内事情が原因のようで、その後昼食休憩、展覧会室への移動の間に学生がほとんどいなくなった。朝の開始時は 100 人ほどだったが、私たちの発表時には 40 人ほどの happy few だけになっていた。]

(21) V. Certo, *Rinascimento: la riscoperta dell'arte antica e della cera persa* [これも前 5 世紀ではなく、技術水準の落ちたルネサンス期の、しかも概説的な話。]

(22) T. Matsumoto, K. Hada, Ricostruzione sperimentale della forma dei Bronzi di Riace [蠟原型・中子土・外型（そとがた）の再現実験。第二次報告書（Vidale et al. 2003）とその仮説に対する反論（Formigli 1999）の検討、提供された Riace の中子土の観察と成分分析、日本の真土（まね）型とネパールの伝統的失蠟法で使われている鑄造土およびその置き方との比較、提供された 3D スキャンデータを活用して手で制作した全身の原型の利用、により、鑄造土の原材料の準備から鑄造までの再現実験を実施した。鑄型（中子・外型）用の土の配合と、積層方法の想定と実践が要で、後者によって間接法を根拠づけた。「謎の四角」は中子土の乾燥のために開けた窓（Formigli）ではなく、筭（こうがい）と同様の役目を果たす型持（かたもち）。「ブロンズの突起」は筭（Vidale）ではなく、筭を準備した穴に熔銅が差したものと推定される。——互換性の問題により作業中の動画を再生できなかったのは残念（以下同じ）。]

(23) T. Matsumoto, K. Hada, Saldatura per colata a ovali continui applicata ai Bronzi di Riace: osservazioni [熔接の部位・形状・方法の観察と考察により、AB の全熔接箇所を特定し、一覧表、分鑄図、熔接構想図を作成。Formigli は特に負荷のかかる箇所は楕円形鑄掛け熔接、その他は楕円形を準備しないただの鑄掛け熔接、と区別していたが、ほぼすべての熔接箇所に「連続楕円形鑄掛け熔接」が適用されていると考える。鑄掛けの方法は、外型で覆う失蠟法。]

(24) T. Matsumoto, K. Hada, Saldatura per colata a ovali continui applicata ai Bronzi di Riace: ricostruzioni [連続楕円形鑄掛け熔接の再現実験とその検証。「A 右足の後ろ半分+前半分+中指」「A 左肩+腕」「B 左腕+手」「B トルソ+左脚+陰囊+ペニス」。難度の高い部分を選んだ。ギリシアブロンズの最大の特徴である分鑄・熔接の目的は、像を完璧に仕上げることにあった。とりわけ狭隘部（腋の下、股、性器）と細部（足の中指、足の甲、手、頭部）。前者は間接法でなければ作れない。現在熔接の痕跡がほとんど認識できない箇所があるが、それは蜜蠟を盛り上げるなどの工夫により熔接が完璧になされたため。]

(25) T. Matsumoto, K. Hada, L'eventuale fusione a parte della gamba sinistra del Bronzo A di Riace [これまでの研究で B の左脚の分鑄・熔接については確定しているが、A の左脚はトルソと同鑄とされている。「B トルソ+左脚+陰囊+ペニス」の熔接の再現実験で、トルソへの陰囊とペニスの接続を鑄がらくりと想定して成功したが、その構造は左脚の熔接と組み合わせられていた。翻って A の左脚が分鑄でないとすると、分鑄である陰囊とペニスはどのように接続されたのか。鼠蹊部については現状でも連続楕円形鑄掛け熔接の痕跡が残り、修復前の写真では左臀部上部にもかすかに熔接線が認められる。B と同じ位置と仕掛けでなされた分鑄・熔接が、より完璧に成功したのではないかと——最後にまとめとして再度「制作工程」（11 参照）を話すことになっていたが、時間がなくなったとの理由で打ち切られた。]

コンヴェーニョの論文集 Atti はレッジョ・カラブリア国立考古博物館から来年 2019 年中の刊行が予定され、原稿の締切厳守が言い渡されている。2016 年 11 月に開催されたシンポジウムの日伊バイリンガル論文集は残念ながらそれより遅くなりそうだ。今後 2022 年 8 月の「リアーチェ」発見 50 周年記念まで複数の催しが企画されている。

上述のように、私たちは再現実験について 5 本発表した。鑄造土、分鑄・熔接、推定される一連の制作工程。鑄掛け熔接の再現実験の成果物を持参し、両日とも会場の一角にずっと展示し、手に取って見ていただいた。特に初日博物館では、休憩時間には多くの参加者と話し、国営放送 RAI をはじめ報道関係者から 10 件ほどインタビューを受けた。すべてブロンズで、計 40kg ほど。最も重要な「B のトルソ+左脚+陰囊+ペニス」はそれだけで 30kg あり、断念せざるを得なかった（上記 24 参照）。

私たちの発表は聴衆に強い印象を与えたようだ。様々な方面からの批判攻撃を覚悟していたが、「リアーチェ」の第二次修復担当で現在パドヴァ Padova 大学のマッシモ・ヴィダーレ Massimo

Vidale 以外、誰からも意味のある批判はなかった。ヴィダーレは私たちが再現を試みた鑄型の制作法に関し、「リアーチェ」から取り出した中子土の状態は、私たちの示した同心円状の概念図とは違う、と初日と2日目の私たちの発表後に繰り返したが(18; 11, 22 参照)、批判はそれにとどまり、松本が分鑄・熔接に関して指摘した「腋の下、臀部、性器など狭隘部分の蠟原型は直接法ではできない」という批判に対しては「考えてみる」とのことだった(24 参照)。そして彼がまだローマ修復研究所の所属だった2010年に、私をはじめ4人が(松本はまだメンバーではなかった)「リアーチェ」の体内から取り出した鑄造土の調査に訪れた時のことを想起し、鑄造土を実際に見に来た研究者は今日まで25年間で「イタリア人でもドイツ人でもフランス人でもアメリカ人でもなく」日本の私たちだけだったと明かし、8年を経て私たちの達成した徹底的な現物観察と再現制作の成果を称揚した。厳しい対決を予期していただけに、これは意外だった。

彼はまた間接法・直接法をめぐる対立したにも拘わらず、第一次修復で「リアーチェ A」を担当したエディルベルト・フォルミツィ Edilberto Formigli の功績を讃え、彼を冷遇したアカデミアを批判した。実際、鑄造土の齎す知見の重要性を彼が強調するまで、「アルテミーシオンのゼウス」の例に見るように、鑄造土が体内に残っていても捨てられていたのだ。第一次報告書(Riace 1984)では「リアーチェ」の制作工程全体を概観する歴史的な論文を発表した(対照的な B の第一次修復担当者の誤ちについては17を参照)。1995年から2004年にかけて、イタリアとドイツの研究者と実作者を束ねて自宅のあるムルロ Murlo (シエナ近郊)でたびたび実験考古学セミナーを開催し、ギリシアブロンズの再現実験の先鞭を付けた。そこへの参加が私の実験考古学の原点となった。

ヴィダーレに対する反論は容易だ。彼の直接法説は専ら中子土の状態を根拠としており、一連の他の工程、とりわけ鑄型制作と分鑄・熔接のことを考慮に入れていない。それに、私たちは中子土の状態は無論念頭に置いているものの、まだ鑄型の原材料と制作法の再現を試みた初期段階に過ぎない。2日目、私たちが残り4本の発表をする前の昼食時に彼の方から共同研究の申し入れがあり、喜んで受け入れた。まずは「リアーチェ」の中子土を再度一緒に見て議論する。さらに、これまで私たちは間接法を前提として再現実験を進めてきたが、ソフィストではないけれど、逆に直接法での制作がどこまで可能か試みる用意がある(資金を出してくれれば)。とりあえず今回の発表 PPT を互いに提供した。

パティナの分析結果を発表したサレント Salento 大学のジョヴァンニ・ブッコリエーリ Giovanni Buccolieri (17 参照)とも共同研究をすることになった。私は2年前にレッジョで開かれたセミナーで、黒色パティナは紀元前後ローマでの第二次利用の際に施されたものではないかと推定したが(当時の報告文を参照 <http://clsoc.jp/agora/column/2016/161126.html>)、ブッコリエーリも共有するに至ったその観点から再度、今度は全身の錆を分析することによって新知見を得ることはできないか。また分鑄・熔接の解明のため「リアーチェ」各所の合金の非破壊分析も新たに行なう。

ブロンズ彫刻の色彩の問題に関連して蛇足を一つ。この研究集会はもともと大理石像の着彩の再現で有名なフィンツェンツ・ブリンクマン Vinzenz Brinkmann 夫妻と、レッジョ館長カルメロ・マラクリーノ Carmelo Malacrino、およびカストリツィオの間で1月25日に博物館で行なわれた4者会談で開催が決まった。しかしブリンクマンは途中で抜けた。訝っていたが、10月にフランクフルトのリーベックハウスで展覧会「メーデイアの恋」が始まって、ようやくその理由が分かった。ローマ国立博物館にある「クイリナーレの拳闘士/君主」の色彩の再現に熱中していたのだ。ここでは控えめに、「リアーチェ」の時と同じく再現案、解釈(Riace A=エレクテウス Erechtheus、B=エウモルポス Eumolpos、拳闘士=アミュコス Amykos、君主=ポリュデウケース Polydeukes)とも問題が多い、とだけ評しておく。<http://www.liebieghaus.de/de/ausstellungen/athen;>
<https://medea.liebieghaus.de>

本稿執筆中、11月14日、ローマ修復研究所 Istituto Superiore per la Conservazione ed il Restauro, Roma の修復者パオラ・ドナーティ Paola Donati が亡くなった。2010-2013年にレッジョ・カラーブリアのパラッツォ・カンパネッラ Palazzo Campanella で実施された「リアーチェ」第三次修復研究を実質的に主導した。この期間計6回調査に訪れた私たちは（修復中に1回でも「リアーチェ」を見たメンバーは11名）、パオラ（と呼んでいた）およびカラーブリア考古監督局 Soprintendenza Archeologia della Calabria のジョルジョ・ヌッチョ・スケピス Giorgio Nuccio Schepis と修復室で長い時間ともに過ごし、かわるがわる内視鏡を覗き、頻繁に議論した。パオラは修復終了後、2014年の短い論文で間接法の根拠を示したが、確信するには至らなかったようだ。今回のブッコリエーリの発表にはパオラも協力しているが（17参照）、修復研究の結論をコンヴェーニョで発表してもらい、議論することができなかつたのは残念である。私たちも寄稿予定の第三次修復報告書は当分出ないかも知れない。第一次修復のフォルミッリは病に侵され、第三次のドナーティが亡くなり、今や「リアーチェ」の修復に携わりその制作技術について考え続けているのは実質的に第二次のヴィダーレだけとなった。

私たちギリシアブロンズ研究グループは2009年3月から現物調査を開始し（最初の対象は「アンティキュテーラの青年およびブロンズ断片群」だった。羽田2004; 2009参照）、2011年4月以降は科研費のお蔭で研究を続けてこられた。これまでに採択された3件合わせて直接経費だけで約3000万円を授けられた。一部メンバーの主張した、今はやりの3Dデータからの立体出力案を私の判断で退けた2012年末以降は、松本が手作りを基本とする再現実験を担当し、現物調査と再現制作を調和的に推進・深化することができた。今回の旅行でもレーギオン、メッサーナの後アテーナイに渡り、アゴラー博物館、ペイライエウス考古博物館などで、ブロンズ彫刻数点に加え鑄造坑からの出土品その他について詳細な調査を実施した。しかし現在受けている科研費は今年度まで（<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-16H03381/>）。困難だが今後改めて資金を得て研究を続け、「リアーチェ」に関する総合的推論の構築、および前5世紀中頃に展示された当初と紀元前後にローマでなされた第二次利用における「リアーチェ AB」全身像の再現制作を、できれば2022年までに達成したい。その次の目標もある。・・・ともあれ、論文を仕上げなくては。

私たちの口頭発表5本で使ったパワーポイントは私のサイトにアップしてある（スライド計350枚ほど。テキストはイタリア語）。論文刊行までは著作権保護のためパスワードをかけているが、本稿が日本西洋古典学会のサイトに掲載された後3日間だけパスワードを外して公開するので、関心のある向きはご覧いただきたい。特に5本目【Riace PPT 5】は、他のどの文献

（Formigli, Mattusch, Haynes, Rolley）よりも、古代ギリシアのブロンズ彫刻の制作作業工程全体の具体的な理解に資すると思う。論文ではさらに改訂を加える予定で、日本語版の公開はその後になる。「直接法・間接法って何？」という方は【制作技術】【技術要約】のページをご覧下さい（日本語）。<https://www.greek-bronze.com/greek-bronze/technique/>